

個が生きる体育科授業の評価

— 観点別学習状況評価を活用した指導と評価 —

岡 本 秀 隆

1. 研究の目的

新学習指導要領では、「一人一人の児童が自ら進んで考え、主体的に判断し、自信を持って表現したり、行動したりできる創造的な資質や能力の育成」¹⁾をめざしている。また、このような資質や能力を育成するには、自ら学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力などの能力を学力の基本とする新しい学力観に立って、児童の良さや可能性を生かし伸ばす学習指導を創造し、展開していくことが強調されている。そこで、本校の体育科では、この考えに基づいて一人一人の児童が自己に応じた学習のめあてを持ち、課題解決的な学習過程の中で自分なりの考えを集団の中で出し合い、認め合い、深め合って技能や知識を習得し「わかる・できる」喜びを得るような個が生きる体育科授業づくりを進めてきた。その中で、一人一人の児童が主体的に学習に取り組む能力を身につけるには、「わかる・できる」喜びを味わうことができる評価を工夫することが大切である。学習評価は、学習指導要領の「第1章 総則」の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の2-(9)に「指導の過程や成果を評価し、指導の改善を行うとともに、学習意欲の向上を生かすように努めること」²⁾と示されているように学習結果のみを評価するのではなく、学習過程における努力や意欲を、即座に評価し、ねうちづけをすることによって学習意欲を高めるものである。また、その結果をもとに指導計画や指導方法の改善に生かすことが大切であると考え。そこで、このような評価観をもとに個が生きる体育科授業の評価のあり方について研究を深めることにした。

2. 研究の内容

個が生きる授業づくりをするには、一人一人の児童が自己に応じた学習のめあてを持って、課題解決的な学習過程の中で解決の仕方を意欲的に考え、集団の中で思考・判断をしながら技能や知識を習得し「わかる・できる」喜びを得ることができるよう授業構成をすることが大切である。児童の学習状況の評価では、「学習指導と評価の関係は、表裏一体の関係にある」ことから学ぶ意欲、思考・判断、技能、知識・理解の4つの観点で評価し、指導との一体化を図っていくことが重要である。さらに、先に述べた個が生きる学力を身につけるには、児童自身が適切に評価できる自己評価能力を育成することが大切である。自己評価能力とは、「学習場面においては、自らの学習状態を、設定された目的や目標に照らして、評価し、その結果をフィードバックする能力」³⁾と言われるように、自己の学習状況を学習目標に照らして評価し、改善点を明らかにし、次の学習に生かしていく力であると考えられている。

そこで、個が生きる体育科授業の評価は、これまで述べてきたことをふまえて次の2点を中心に工夫を行うことにした。

(1) 観点別学習状況評価を活用した指導と評価

新学習指導要録では、体育科の目標や内容をもとに次の4つの観点別学習状況の評価観点と趣旨が図1のように示されている。⁴⁾これらの4つの観点別学習状況の評価観点は、体育科がめざしている生涯を通じて自ら進んで運動やスポーツに親しみ、健康で安全な生活を営む能力を身につける教育を実現するために適切であると考え。また、これまでの評価観点到学習意欲や思考・判断を加えたり、構成順を①関心・意欲・態度②思考・判断③技能④知識・理解と入れかえているのは、体育学習を通して自己教育力を育成し、新しい学力観の実現を図ることを重視したものと思われる。

そこで、指導案作成においては、4つの観点別の達成目標の設定を行うことにした。これらの観点別の達成目標は、指導案の学習過程の中で具体的な評価内容で示されることによって児童の学習状況が評価され、ねうちづけをしていく上で役立つものである。また、学習意欲、思考力、判断力、技能、知識・理解等の育成をふまえた授業構成がしやすいものとする。

学年 観 点	第 1 学年	第 2 学年	第 3 学年	第 4 学年	第 5 学年	第 6 学年
運動や健康・安全への 関心・意欲・態度	だれとでも仲よく、健康・安全に留意して、進んで楽しく運動をしようとする。	だれとでも仲よく、健康・安全に留意して、進んで楽しく運動をしようとする。	約束やきまりを守り、互いに協力し、健康・安全に留意して、最後まで楽しく運動をしようとする。	約束やきまりを守り、互いに協力し、健康・安全に留意して、最後まで楽しく運動をしようとする。	協力、公正などの態度を身に付け、健康・安全に留意し、最善を尽くして、運動の楽しさや喜びを求めて運動をしようとする。また、自分の心身の健康や身の回りの安全に関心をもち、進んで健康で安全な生活をしようとする。	協力、公正などの態度を身に付け、健康・安全に留意し、最善を尽くして、運動の楽しさや喜びを求めて運動をしようとする。また、自分の心身の健康や身の回りの安全に関心をもち、進んで健康で安全な生活をしようとする。
運動や健康・安全についての思考・判断	基本の運動やゲームの仕方を考え、工夫している。	基本の運動やゲームの仕方を考え、工夫している。	運動の特性に応じた課題の解決を目指して、運動の仕方を考え、工夫している。	運動の特性に応じた課題の解決を目指して、運動の仕方を考え、工夫している。	運動の特性に応じた自己の課題の解決を目指して、活動の仕方を考え、工夫している。また、自分の身体の健康や身の回りの安全について考え、判断している。	運動の特性に応じた自己の課題の解決を目指して、活動の仕方を考え、工夫している。また、自分の身体の健康や身の回りの安全について考え、判断している。
運動の技能	基本の運動やゲームを楽しく行うために必要な技能を身に付けている。	基本の運動やゲームを楽しく行うために必要な技能を身に付けている。	運動の特性に応じた技能を身に付けている。	運動の特性に応じた技能を身に付けている。	自己の能力に応じた課題を理解して、運動を行うとともに、運動の特性に応じた技能を身に付けている。	自己の能力に応じた課題を理解して、運動を行うとともに、運動の特性に応じた技能を身に付けている。
健康・安全についての知識・理解					体の発育や心の発達、けがの起こり方とその防止の原則について理解している。	病気の起こり方とその予防の原則及び健康の保持増進に必要な生活行動と良い環境について理解している。

(2) 自己評価能力の育成

一人一人の児童が生涯を通じて自ら進んで運動やスポーツに親しみ、健康で安全な生活を営む能力を身につけるには、教師の評価だけでなく、児童が自身が自分の学習への取り組みを評価し、達成感や成就感を味わうことが大切である。そのためには、児童が自己の学習状況を振り返り、見直し、修正する自己評価能力を養うことが必要である。児童の自己評価能力を育てるには、次の3点の教師の援助が考えられる。

- ① 自己の学習状況を振り返り、見直し、修正するための観点別評価基準を明確にする。
- ② 指導計画の中で発達段階や各教材の内容をふまえた学習カードや体育ノートを活用した自己評価の場や方法を適切に設定する。
- ③ 教師が学習過程の中で児童のすぐれた発言やできばえ、伸びを発見した時に即座に肯定的に評価する。また、友達との相互評価によって動きや取り組みの良さを認め合わせることによって、そのねうちづけをして、学習意欲や観察力や思考・判断力を高める。

3. 研究仮説と検証方法

これまで述べてきた考えをもとに次のような研究仮説を設定した。

仮説 1

観点別の達成目標をふまえた授業構成や評価を行うと、一人一人の児童が学習意欲を持って取り組み、思考力・判断力を働かせながら技能や知識・理解を身につけ、達成感や成就感を味わうことができるであろう。

仮説 2

観点別評価基準をふまえた自己評価や教師や友達の肯定的な評価によって取り組みや伸びのねうちづけを行うと、自己評価能力を高めることができるであろう。

研究仮説に対する検証は、第3学年「東雲折り返しリレー」の授業実践を通して行うことにした。分析は、VTRによる授業記録や事前・事後の意識調査や評価活動に活用した学習カードや体育ノート等から、児童の発言、動き、考え方、教師の働きかけを中心に行うことにした。

4. 実践例 第3学年 単元「東雲折り返しリレー」

(1) 指導にあたって

① 単元について

折り返しリレーは、チームで作戦を工夫して、走り継ぎながら勝敗を競い合う運動である。折り返しリレーの楽しさは、みんなで協力してバトンパスをしながら競争するところにある。また、チームで作戦を工夫し練習や競争をすることは、リレーの楽しさを味わわせながら折り返しやバトンパスの技術や走力を高め、集団でのかかわりを深めることができると考える。

一人一人の児童が主体的に学習に取り組むには、児童の実態をふまえて「わかる・できる」喜びを味わわせる授業構成が必要である。そこで、次の3点を留意して授業構成することにした。

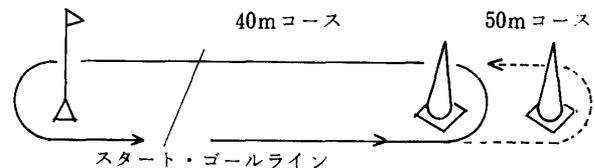
ア) 折り返しリレーに対する児童の興味・関心や学習欲求の傾向、運動能力等の実態をふまえて指導内容や方法を工夫し、一人一人がリレーの楽しさを味わわせることにした。

50m走の記録は、9秒台11名、10秒台19名、11秒台8名であった。リレーの学習参加意欲は、やりたい30名、ふつう6名、やりたくない2名であった。やりたくないと答えている児童の主な理由は、走るが遅いことであった。

そこで、一人一人の走力が十分に発揮できる走距離の選択ができるように図2のような40m

と50mの二つのコースを設定した東雲折り返しリレーを教材開発した。そして、各チームで40mコースを走る者2名と50mコースを走る者の3名を決定し、走る順番を工夫しながら楽しくリレーができることをねらいとした。

図2 東雲折り返しリレー



イ) 記録や順位の上をめざし、スピードを落とさない折り返しやバトンパスの仕方を追求する集団思考の場を入れた課題解決的な学習過程を構成し、集団でかかわりながら観察や思考、練習や競争を行うことによって課題追求させる。そして、教師による児童の運動技能や学習態度の伸びに対する評価や児童自身による自己評価や相互評価によってねうちづけをし、運動に対する認識力を高めさせる。

ウ) 意欲・関心・態度、思考・判断、技能の観点別の達成目標を設定する。そして、達成目標に基づいて授業構成をする。また、一単位時間の授業の指導案には、具体的な評価内容を示し児童の学習状況を評価し、結果をふまえて指導計画や指導法の改善をに生かすようにする。

エ) 観点別の学習評価基準をもとに学習カードや体育ノートを活用して学習のめあての達成状況を自己評価・相互評価をし、「わかる・できる」喜びを味わわせながら次時の課題設定や練習の仕方を工夫させる。

② 指導目標

ア 走る距離や走る順番を工夫しながら規則を守り、勝敗を素直に認め合って仲良くチーム対抗の折り返しリレーができるようにさせる。

イ 友達の動きを観察し、走りながらのバトンパスの仕方を教え合って工夫させる。

ウ 全力で走ったり、すばやい折り返しや走りながらのバトンパスの仕方を身につけさせる。

③ 単元の観点別学習評価基準

関心・意欲・態度	規則を工夫し、きまりを守り、互いに協力し合っ てなかよくリレーをしようとする。
思考・判断	記録を高めるための折り返しやバトンパスの仕方を考 え、工夫することができる。
技 能	40mや50mを全力で走ったり、スムーズな折り返しや バトンパスの仕方を身につけてリレーができる。

④ 指導計画 (全6時間)

第一次 折り返し走をする。 _____ 2時間

- 折り返し走の内容を知り、40mと50mを全力で走る。
- スムースな折り返しができるようにする。

第二次 折り返しリレーをする。 _____ 3時間

- 一人一人の走る距離や走る順番を工夫させる。
- 走りながらのバトンパスができるようにする。

第三次 折り返しリレー大会をする。 _____ 1時間

(2) 指導の実際

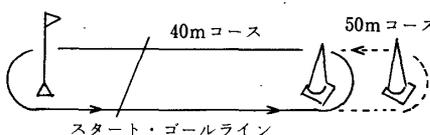
① 本時の目標 (第二次, 第2時)

スピードが落ちないバトンパスをするには、バトンを受ける人が前に走りながらバトンを受け取ることが大切であることに気づき、できるようにさせる。

② 本時の観点別評価基準

関心・意欲・態度	走る距離・走る順序を工夫し、きまりを守ってなかよくリレーしようとする。
思考・判断	スピードを落とさないでバトンパスをするには、バトンを受ける人が前に走りながらバトンを受け取ることが大切であることに気づくことができる
技能	バトンを受ける人が前に走りながらバトンを受け取り、スピードを落とさないバトンパスができる。

③ 指導過程と児童の反応

学 習 過 程	指 導 上 の 留 意 点	評 価 の 観 点
<p>1. 準備運動をする。</p> <p>チームごとに工夫した運動</p> <p>折り返し走</p> <p>2. 第1回目のリレーをする。</p> <p>作戦</p> <p>バトンパス</p> <p>走る距離</p> <p>走る順番</p> <p>3. スピードの落ちないバトンパスの仕方を話し合っ練習をする。</p> <p>前時と第1回目のリレーの記録の比較</p> <p>バトンパスの示範の観察</p> <p>バトンパスでバトンを受ける人の動きについての集団思考</p> <p>各チームでバトンパスの練習</p> <p>4. 第2回目のリレーをする。</p> <p>バトンを受けとる人が前に走りながらのバトンパス</p> <p>5. 本時のまとめをする。</p> <p>わかった・できたこと</p> <p>教え合ったこと</p>	<p>1. 折り返しリレーを意欲的に行うために各チームで柔軟性を中心とした運動とこれまで学習した折り返し方を想起して折り返し走することを指示する。</p> <p>2. 個人差を認め合っ、なかよくリレーをさせるために各チームで各自の走る距離や走る順番などを工夫して作戦をたてさせる。</p>  <p>3. スピードの落ちないバトンパスの仕方ができるようにするために次の点を留意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リレーの記録を高めるには、前時と第1回目の記録を比較し、バトンパスの仕方が大切であることを理解させる。 ・バトンパスでバトンを受けとる人がとまっている場合と前に走りながら受けとる場合を比較しながら観察し、受けとる人が走りながらバトンを受けとることの大切さを集団思考を通して気づかせる。 ・各チームでバトンを受けとる人が前に走りながらのバトンパスを中心に練習し、相互評価をすることを指示する。 <p>4. 練習の成果を確かめるために第1回目と走る距離や順番を代えないでリレーをすることを指示する。</p> <p>5. 記録が伸びたチームにバトンパスで良くなった点や教え合ったことを発表させ、全体で認め合っ、次時の課題を設定させる。</p>	<p>○ チームで走る距離や走る順番などの作戦を工夫しているか。</p> <p>○ きまりを守ってなかよくリレーをすることができたか。</p> <p>○ スピードの落ちないバトンパスの仕方を考えているか。</p> <p>○ バトンを受ける人が前に走りながらバトンを受け取ることが大切であることに気づくことができるか。</p> <p>○ バトンを受ける人が前に走りながらバトンを受けとり、スピードを落とさないバトンパスができるか。</p> <p>○ 記録や順位をあげることができたか。</p>

最初に、各チームで各自の走る距離や順番を決定させて第1回目の折り返しリレーを行わせた。特に、前時の反省で話し合ったバトンパスに気をつけてリレーすることを指示した。

次に、「どんなバトンパスをすると記録がよくなるか」と発問し、記録を上げるためのバトンパスの仕方を先のリレーをもとに予想をさせた。児童は「受け取る人がリードしながらバトンを受け取る」ことを発表した。そこで、受け取る人がリードしてバトンを受け取る場合と止まって受け取る場合のバトンパスを観察させ、どちらがむだな時間をかけないかを比較させた。児童は、「リードしてバトンを受け取る方が、渡す人がブレーキをかけないので、むだな時間をかけない」や「止まってバトンを受けると渡す人がブレーキをかけて止まるので、バトンを落とさないで渡すことができるが、時間がかかりすぎ。」等の考えを出し合ってリードをしながらバトンパスをする方がむだな時間をかけないことを集団思考の場面で認識した。次にチームでバトンを受け取る人がリードしながらバトンパスをする練習をした。チームの中には、バトンを受け取る人に声をかけてスタートするタイミングを教え合っている姿も見られた。

最後に、各チームの練習の成果を試すために①リードしながらバトンパスができたか②記録を上げることができたかを中心に相互評価をしながら2回目のリレーを行った。リレー終了後に、わかったこと、記録やバトンパスの仕方の伸び、教え合ったことを発表させ、全体で認め合った。

(3) 結果と考察

仮説1

観点別の達成目標をふまえた授業構成や評価を行うと、一人一人の児童が学習意欲を持って取り組み、思考力・判断力を働かせながら技能を身につけ、達成感や成就感を味わうことができたか。

授業の終了後の学習に対する調査結果は、表1の通りであった。表1によると92%の児童が、やる気を持った取り組みができています。これは、

	内 容	できた	ふつう	できない
意 欲	やる気を持って取り組むことができたか。	92	8	0
態 度	友達と教え合った、練習やリレーができたか。	71	24	5
思 考 判 断	リレーの記録を高めるためのバトンパスの仕方を考えることができたか。	89	11	0
技 能	リードをしながらバトンパスができるようになったか。	84	10	6
意 欲	今日の学習は、楽しかったですか。	90	8	2

(%) 教材がリレーであったことや二つのコースを設定したことによるものと思われる。また、リレーの記録を高めるためにバトンパスの仕方を考えることは、89%の児童ができています。各自の試行と集団思考での観察による比較をもとにバトンパスの仕方を考えさせたことは、思考・判断力を高めるのに効果的であった。しかし、リードしながらバトンパスができたと答えている者は、84%であった。できていない者が6%見られた。これは、スタートするタイミングが十分

にわからなかったことによるものであった。そこで、バトンを受け取る人がスタートするタイミングを理解させる指導が必要であると思われる。また、友達と教え合ったりして練習やリレーをする態度は、71%の児童しかできていなかった。これは、練習の形態や教え合う観点が十分に児童に理解されていなかったことによるものと考えられる。また、学習の楽しさは、90%の児童が達成感や成就感を味わっている。しかし、10%の児童がふつうや楽しくなかったと答えている。これは、勝敗にこだわりすぎや技能の伸び、そして、教え合い等が不十分であったものと思われる。今後、これらの結果をもとに指導計画や指導法の改善することが必要である。このように学習意欲・関心・態度や思考・判断、そして、技能等の観点別の達成目標による授業構成や評価は、授業構成の観点や改善すべき点を明確にすることができた、また、一人一人の児童が主体的に学習に取り組む能力を育

成するのに効果的であった。

仮説2
 観点別評価基準をふまえた自己評価や教師や友達の肯定的な評価によって取り組みや伸びのねうちづけを行うと、自己評価能力を高めることができたか。

毎時間後、図3の学習カードを活用して自己の学習状況を評価させた。児童は、学習カードに

東雲折り返しリレー 学習カード (月 日)			
名 前			
(1) 今日の学習のめあて			
(2) やる気を持って取り組むことができましたか。	できた	ふつう	できなかった
(3) 友達と教え合ったりして、練習やリレーができましたか。	できた	ふつう	できなかった
(4) リレーの記録を高めるためにリレーのしかたを考えたり、発表することができましたか。	できた	ふつう	できなかった
(5) わかったことはありましたか。	あった	わからない	なかった
それは、どんなことですか			
(6) できるようになったことはありましたか。	あった	わからない	なかった
それは、どんなことですか			
(7) 次の時間にもっと知りたいことややまくなりたいことはどんなことですか。			

よって自己の学習状況を評価することができた。そして、がんばったことやこれから努力をしなければならないことがわかった。さらに、前時と比べてよくなっているところがわかったなど自己評価をすることの良さを認め、進んで学習に取り組もうとする姿勢が体育ノートの感想文からうかがえた。これは、自己評価能力育成の「自己評価の大切さに気づき、自ら進んで取り組もうとする姿勢を身につける」⁵⁾という第一段階であると思われる。

また、学習の中でわかった・できた・教え合ったことや次時の課題を体育ノートに書かせ、ノートに朱書や肯定的な評価によるねうちづけをすることによって自己評価能力高めることにした。特に、各自による自己評価を学級全体に深化・発展させ、一人一人の児童のやる気を育てることをねらいとした。表2は、体育ノートの授業感想を次時の課題や手だての記載があるA段階、順位や記録の成果の理やわかった・できたこと等の記載があるB段階、順位や記録のみが記載してあるC段階に分けたものである。C段階

授業感想の分析 (%)

時 間	授業感想の分析 (%)		
	C 段階 記録・順位	B 段階 理由・わかった・できた	A 段階 課題・解決法
1時間目	100	45	15
2時間目	100	50	21
3時間目	100	81	22
4時間目	100	81	24

は、全ての児童のノートに見られる。B段階は、最初から50%以上の児童に見られる。このB段階の児童は、記録や順位伸びで達成感や成就感を味わうことができていると考える。しかし、この達成感や成就感だけでは、次の学習への意欲的な取り組みにならないと考える。そこで、次の学習に意欲的な学習への取り組みをさせるには、A段階のように次時の課題や手だてを持たせることが大切である。しかし、今回の授業の最初は、A段階が15%程度しか見られなかった。そこで、集団思考の場面でわかったことや教え合ったことに対する教師の肯定的な評価によってねうちづけを行うことに心がけた。その結果、わかったことや教え合ったことの記載を含めて次時の課題や解決方法が見られるようになった。

5. まとめ

- (1) 観点別の達成目標による授業構成や評価は、授業構成の観点や改善すべき点を明確にすることができた。そして、一人一人の児童の学力の伸びやつまづきをとらえ、主体的に学習に取り組む能力を育成するのに効果的であった。しかし、意欲・関心・態度や思考・判断の観点の目標設定の仕方の検討が必要であった。
- (2) 観点別評価基準を明確にした自己評価と教師や友達の肯定的な評価によるねうちづけは、自己評価能力を高めるのに効果的であった。今後、さらに、自己評価能力の育成の仕方を検討したい。

引用文献・参考文献

- (1) 文部省 初等教育資料 8月号 東洋館出版社 1991年 p. 52
- (2) 文部省 小学校学習指導要領 大蔵省印刷局 1989年 p. 4
- (3) 全国教育研究所連盟編『子どもは創る—自己教育力への道—』下巻ぎょうせい1989年 p. 153
- (4) 文部省 初等教育資料 6月号 東洋館出版社 1991年 p p. 92~93
- (5) 全国教育研究所連盟編 前掲書, p. 161
- (6) 吉本均・加藤誠一著『達成目標を明確にした授業づくり入門』 明治図書 1982年